



◆小説◆  
あらおし悠  
◆挿絵◆  
アルデヒド

# 百合色学園寮

YURIRO-GAKUENRYOU

恋人はルームメイト

立ち読み版

序章	桜とともに散った告白	006
第一章	初めてのキスは突然に	011
第二章	サヨナラきょうちゃん	064
第三章	思いがけないルームメイト	123
第四章	三人でもいいですか	182
終章	百合色に染まる部屋	249

## 登場人物紹介

Characters



さ さきりん

### 佐崎鈴

同性を好きになってしまったことに悩む少女。親の仕事の都合で、今回全寮制の聖リス女学園に転校することとなる。



おりべ さあや

### 織部紗彩

学園を代表する存在・華姫として、学園のみんなに慕われる先輩。転校してきたばかりの鈴にも優しく接する。

か なみきょう か

### 鹿波香佳

転校前に鈴と同級生だった少女。学年は同じだがひとつ年上。



鈴は身体の欲求に逆らって、自分を紗彩から引き剥がした。脱力していた膝のせいで離れた拍子に姿勢を崩し、よろめきながら数歩後ずさった。

「資格って……どういうこと？」

やっとの思いで離れて立ち尽くす鈴に、硬い声で紗彩が尋ねる。まるで怒っているように聞こえて、その顔を直視できない。それでも鈴は、深呼吸して必死に声を絞り出した。

「あたしは……誰かを、好きになっちゃいけないんです……」

「それって、どういう意味？」

紗彩の問いに、鈴は答えることができない。唇を噛んで視線を外すと、彼女は、それ以上は尋ねようとしてこなかった。

とはいえ、帰る場所は同じ部屋。ふたりの間に流れるのは、ひたすら気まぎれで重い空気。食堂での夕食も別。部屋に備え付けの浴室を鈴に譲り、紗彩は別館の大浴場へ。

結局その日は、ベッドに入るまで、ほとんど言葉を交わさなかった。

(あんなに親切にしてくれたのに……)

ベッドの中から紗彩の背中を見詰める。距離は昨日と同じなのに、ひどく遠くにいるように見える。自分のために寮監に掛けあってくれたのが、遠い昔のことのようだ。

鈴は寝返りを打ち、彼女に背中を向けて眼を閉じた。

(先輩……どうして、あたしなんか……)

父親が学園の経営者で、理事長で。そしてその娘である紗彩は、学園を代表する華姫様。自分で言っていたような、普通の生徒なんかではない。

(……そういえば、きょうちゃんのお父さんも、代議士さんって噂だったっけ……)

彼女が望まないので、正確なところは最後まで聞かずじまいだったけど、偉い人なのは間違いない。そんな共通点があるふたりでも、自分の境遇に対する姿勢は、正反対だ。

香佳は、自分の事情を知られることを、極端に嫌がった。鈴を助けるために例外的に立場を利用したけど、それだって自ら何かを宣伝したわけではなく、周囲が勝手に想像して手を引いただけ。

対して紗彩は、自分の置かれた立場を自然に受け入れているように見えた。華姫様と呼ばれることにも抵抗は感じていないようだし、だからといって、学園代表という肩書に気負っているわけでも、それを鼻にかけているわけでもない。まるで、生まれながらの王女様。そう振る舞っているのに、少しも嫌味に感じない不思議な女性。

そんな人に好意を示され、嬉しくないはずがない。でも、その「好き」だって、どこまで本気が分からない。

(先輩は、あたしみたいなつまんない子の、どこを気に入ったの?)

——あなたは、違うみたいね。

香佳の、あの言葉が脳裏に甦る。もしかしたら紗彩の「好き」は、それに近い意味なのかもしれない。この学園のお嬢様たちは、純粹培養された温室の花。それに比べたら自分

は雑草のようなもの。珍しいものに興味を引かれただけ。

(そうだよ。先輩みたいな素敵な人が、あたしなんかを本気で好きになるはずないし)

すぐに飽きられる。そうと分かっていながら、鈴は、紗彩の言葉にすがりたい自分も感じていた。この寂しさを埋めてくれるなら誰でもいい。そんな自暴自棄に陥りそうになる。

(駄目だよ、そんなの……！ あたしは………きょうちゃんを苦しめた)

鈴は小さく頭を振った。その罰をまだ受けていないのに、誰かに好きになってもらっていないはずがない。

「ごめん……ごめんね………」

きょうちゃんと唇は動いたけれど、声にならない。転校初日の疲れが出たのか、重くなつた目蓋が降りてくる。まどろみの中で、鈴は繰り返し香佳に謝る。

前の学校で、担任が鈴の転校を告げた時、香佳はどんな顔をしていたのだろう。最後に見たのは、鈴から逃げたあの横顔。一年近くも一緒にいたのに、今は、それ以外の表情を思い出せない。

零れる涙で枕を濡らしていると、部屋の中で何かが動く気配がする。急に意識が覚醒するけど、それが何かを確かめる前に誰かが髪に触れてきた。

「きゃっ……!!」

「ごめんなさい。起こしてしまった？」

パジャマ姿の紗彩が、鈴を見下ろしていた。窓から射す、青白い月明かりに照らされた

彼女の表情に、怒っている様子はない。むしろ心配そうに眉を下げている。昼間のこともあって、どう答えればいいのか分からない。枕に隠れるように視線を逸らすと、紗彩が髪を撫でてきた。

「ごめんなさい……。わたしが想像していた以上に、あなたは辛い思いをしていたのね」  
「え……？」

「時々、ひどく沈んでいることがあったから」

香佳ほどではないにせよ、自分では、あまり感情が面<sup>おもて</sup>に出る方ではないと思っていたのに。昨日今日会ったばかりの紗彩にお見通しだったなんて。

「わたしならあなたを救える、なんて自惚れたりはしないわ。でも同じ部屋の子が悲しい顔をしているんだもの。無理にとは言わないけれど、せめてお話くらいは聞かせて？」

髪に触れながら、鈴のベッドに腰を降ろす。

鈴は、逡巡した。簡単に他人に話せるようなことじゃない。でも、髪を梳<sup>けず</sup>る紗彩の優しい指に、凍えきった鈴の心は抗いきれなかった。

「あたし……好きな人がいたんです」

鈴は上半身を起こし、彼女に髪を委ねながら、ぼつりと呟いた。

紗彩の手が、止まる。しかしその表情に変化はなく、鈴の言葉をどう受け取ったのかは分からない。ただ、何も言わずに鈴が言葉を続けるのを待っているようだった。

「その人は、女の子で……転校する前、思いきって告白したんですけど……だけど……」

布団をギュッと握り締めた手で、その先を察したのだろう。身体を寄せて、温室でそうしてくれたように、抱き締めてきた。

「あ、当たり前……ですよね。女の子が……女の子を好きになるなんて、普通じゃないから……。大切な友達だったのに……。嫌われるのが分かったのに……！」

感情が昂り、声が悲鳴に近くなる。紗彩は、わずかに眉を曇らせたものの、それを抑えようとはせず、淡々と呟いた。

「あなたが温室で見ていたイフエイオンの花言葉はね……『悲しい別れ』なの」  
「悲しい……別れ……」

そんな意味があつたなんて。小さな花にまで自分の全てを見透かされたような錯覚に、寂しさがぶり返す。零れそうな涙を堪えるけれど、抑えきれず、嗚咽となって溢れ出す。

「ごめんね、鈴ちゃん。あなたを悲しませるつもりはなかったの。ただ、少し気になってしまったものだから……。花言葉なんて、ただの遊び。気にすることないわ」

「でも、あたしがあの娘を傷つけてしまったのには変わりないんです。あたしが……女の子が女の子を好きになったのが間違いなんです……!!」

「……どうして？」

パジャマの裾を握って唇を噛む。そんな鈴に、紗彩は不思議そうな顔で首を傾げた。

「どうして……だって、そんなの普通じゃないし……」

「そうかもしれない。でも忘れたの？ わたしも、あなたに好きって言ったわ」



感情のままに叫んでいた鈴は「あ……」と言葉を詰まらせた。それで悩んでいたはずなのに、これでは紗彩まで普通じゃない人になってしまう。

「で、でもそれは……。そう、ただの同情……」

そうに決まっている。そのはずなのに、紗彩はふるふると首を振り、まっすぐな瞳で鈴を見詰めてきた。

「その娘は受け入れられなかったのかも知れない。でも、だからといって、女の子が女の子に惹かれるのは、いけないこと？」

何を言っているのだろう。鈴は呆然と彼女を見上げた。月明かりに光る瞳があまりに綺麗で、逆上<sup>のぼ</sup>せ上がった鈴の耳には、彼女の言葉が意味を伴って入ってこない。

「人が人を好きになるのは自然なこと。だったら、女の子同士でも、それを後ろめたく感じる必要なんて何もないはず。そうでしょう？」

「でも……でも、あっ……！」

再び抱きすくめられた。さっきよりもきつい抱擁に、身動きひとつできなくなる。頬と頬とが擦れ合って、ゾクゾクするような心地よさに、鈴も思わず彼女の背中に腕を回す。

「だって仕方ないじゃない。あなたのこと、好きになっちゃったんだもの……」

「お、織部先輩……」

「だめ。名前で呼んで。紗彩って……」

彼女の指先が、甘えるように鈴の唇をなぞる。触られたところがピリピリ痺れて、頭の

中までぼやけていく。

「さ、さ……………さ、あや……………せん……………ばい……………」

呼び方を変えたただけなのに、鼓動が一気に加速した。こんなに速くて大丈夫なのかと不安になるほど、心拍数が跳ね上がっていく。

「紗彩先輩……………ッ！」

急激な身体の変化に不安になって、紗彩の首に腕を巻きつける。泣き出しそうな顔で助けを求める。鈴の控え目な胸を、彼女の豊かな乳房が受け止めた。パジャマ越しに柔らかな膨らみを感じ、反射的に身体を引こうとした。しかし紗彩は逃がしてくれない。逆に背中と首筋を押しさえつけるようにして、さらにきつく抱き締める。薄い布地が女性特有の弾力を生々しく伝え、鈴の身体は、まるで凍えるように激しく震えた。

「んふ、こんなに震えちゃって……………。ああ……………可愛い。鈴ちゃん、好き……………大好き……………」

「あッ……………はああ……………」

紗彩の囁きに耳朶をくすぐられ、鈴も熱くて深い吐息を漏らす。本当はあの娘から欲しかった言葉が、鈴の情緒を激しく揺さぶった。

頬に、掌が当てられた。自然に上向いた唇に、紗彩の吐息を熱く感じる。

「……………!!」

焦点が合わないほど間近で、紗彩の長い睫毛がそっと閉じられた。呆けた頭にも彼女の意図を察し、さすがに躊躇する。

「好き……」

甘い囁きに唇がくすぐられ、思わず引き込まれそうになった。でも、香佳への気持ちをはき切れないまま紗彩に伝えることはできない。なのに、迫る瞳から目を逸らせない。

(……………この眼、どこかで……………)

目尻は垂れ気味ながら、長い睫毛と切れ長の綺麗な眼。鈴の脳裏に誰かの面影が浮かんでくる。それはすぐに像を結び、紗彩に重なる。

(……………そうか。先輩の眼……………何となく、きょうちゃんに似てるんだ……………)

紗彩の顔に香佳が重なる。それは哀しみが見せた幻。そうと知りながら、胸を掻き毟りたくなるような悲哀に錯乱した鈴は、眼を閉じ、彼女の求めに応じていた。

「ん、は……………あつ……………」

重なり合う唇。混じり合う吐息。身じろぎすると触れたところがわずかに擦れて、心地よさに頭の中がぼやける。

(あれ……………あたし、何を……………!)

我に返り、そこで初めて自分がしていることを自覚した。

(ああ……………あたし、キス……………してるんだ……………。先輩と……………女の人と……………)

それは、あの娘に捧げるはずだった、初めての口づけ。叶わなかった想いと、諦めにも似た罪悪感に胸が苦しくなる。

「……………んッ!」

息ができないほど塞がれていたわけではないけれど、鈴は小さく身じろぎした。そのせいで、軽く触れ合うだけだった唇が簡単に外れる。

「キス、初めて？」

紗彩の問いに、鈴は熱に浮かされたような顔で頷いた。こんなわずかな接触なのに、口元に生まれた快感で頬が火照る。できることなら、もっと素直な気持ちで初めてのキスを体験したかった。それが顔に出たのだろう。紗彩が、少し顔を曇らせる。

「やっぱり、初めてがわたしでは嫌だった？」

「ち、違います……。紗彩先輩が嫌なんじゃなくて、あたし……自分が許せない」

香佳を諦めきれないまま、紗彩とキスした自分が。そんなの、どっちにも失礼だ。香佳にも、紗彩にも。そう言うと、彼女は少し考え、そして悪戯っぽい笑みを唇に浮かべた。

「なら……一緒に悪い子になっちゃいましょう」

「悪い子？ 一緒につて……？」

「わたしは、好きな人がいる娘を誘惑せずにはいられない弱くて悪い人。あなたは、そんな誘惑に負けてしまう弱くて悪い子。……どう？」

「先輩……」

そんなのメチャクチャで、デタラメだ。でも、鈴の心を少しでも軽くしようとしてくれる。同時に、自分の欲求を満たすことも諦めていない。

（そんなの、ずるい。ずるくて……優しい……）

どう答えていいのか考えがまとまる前に、不意打ちのように再び唇を塞がれた。

「んぐ!! むーっ!!」

驚いて肩を押し返そうとする鈴の手首を押さえつけ、唇を捻じ込んでくる紗彩。甘い疼きに気が遠くなりかけ、慌てて紗彩の首にしがみついた。彼女も鈴を支えるようにしっかりと抱き締め、押し倒す勢いで覆い被さってくる。

「ん! む……あふ、せんば……ふあ、あふうう……」

「鈴ちゃん……ああ……ちゅ、ちゅぱっ」

紗彩の唇が鈴のそれに、わずかな隙もないほどぴったり吸いつく。かと思えば、小鳥のように上下の唇を交互に啄む。

(ダメッ! こんな……いけない……!)

紗彩はああ言ってくれたけど、よく考えたら恋人同士になったわけじゃない。それなのに、キスしている。悪いことと思っても、唇と唇が擦れる甘美な接触から逃れられない。心と身体が酔い痴れて、弄ばれるままに背筋を震わせてしまう。

「あふ……ふあ……あうんっ!」

「あは……可愛い声。名前の通り、鈴みたい、綺麗で可愛い……。ねえ、もつと聞かせて? あなたの声、わたしに聞かせて……」

「あ、そんな……先輩……ん、つむ……ん、きゅッ、ふあああ……」

唇と吐息を激しく吸われ、だんだん意識が朦朧となってきた。彼女にのし掛かれるま

まベッドに押し倒される。両手首を掴まれながら唇を貪られると、まるで辱めを受けているような錯覚に陥った。

(やだ、恥ずかしい……でも先輩の唇、柔らかくて、熱くて……あたし……あぁッ!!)

甘美な恥辱に耐えきれず、腰が勝手にシーツの上でくねくね踊る。突き上げた顎を紗彩が吸い、そして唇に戻ると、さらに激しく、唾液ごと吸引する。

「ちゅ、ちゅぱっ。ちゅ、ちゅりゅうううっ!」

「ん、むうううっ! せ、先輩、激し……あう、むあぁう! あむ……みゅうううッ!」

不意に、蠢くような感覚が腰の奥に生まれた。それはたちまちお腹の下辺りを覆い尽くし、恥ずかしい脚の付け根の中心へと集まってくる。

(な……なにこれ……。やだ、やあぁあぁん!)

香佳を想った時にも感じた股間の疼き。でも、こんなに激しいのは初めてだ。戸惑う間も、紗彩は鈴の頬を両手で挟み、下唇を甘噛みした。ちよつと待つて欲しいのに、その余裕は与えられず、仕方なく内腿を擦り合わせ、必死に疼きをごまかそうとする。

「はぁうん! せ、先輩それ……それ、あ……!」

「はぁ……はぁ……鈴ちゃん……好き、鈴ちゃん……あぁあ……」

紗彩の喘ぎとともに、とろりとした唾液が半開きの口腔に零れた。それは、ほんの一滴。なのに鈴の舌先は敏感にそれを捉え、無意識のうちに喉の奥に流し込む。同性の唾液を口にする背徳感に、頭の奥がゾクゾク痺れる。



「何をしているの!？」

いきなり、カーテンの向こうから硬い声で咎められた。驚きのあまり身体が硬直。オナニーに夢中になるあまり、声が大きくなりすぎた。蒼褪めながら、それでも用意していた言い訳を必死に繰り出す。

「あ、あの……その……ね、熱がひどくなって、うなされたっていうか……ゴホゴホ」

「嘘おっしゃい！ そんな言い訳で先生はごまかせないわよ!!」

「あ、待つて……きゃあ!!」

勢いよくカーテンが開けられた。少しでも身体を隠そうとして膝を曲げたら毛布が床に滑り落ち、自分の胸と股間に手を這わせた、恥ずかしい姿が乱入者の目に晒される。

「……ほら、やっぱりオナニーしてた」

「…………ごめんなさい！ ごめんなさい!」

破滅だ。終わりだ。グッと目蓋を閉じ何度も何度も謝罪する。

「あまり大きな声を出さないで。先生が戻ってきちゃう」

「せ、先生が……つて……………え？」

パニックに陥ったまま、恐る恐る目を開ける。

「保健室でひとりエッチなんて、鈴ちゃんたらイケナイ娘♪」

「お……………お姉さま!」

紗彩が、楽しそうな微笑みで鈴を見下ろしていた。どうしてここにと聞く前に、彼女は



カーテンを閉め直し、ベッドに腰を降ろした。

「鈴ちゃんの教室に行ったら、保健室だって言われたの。もしかして、わたしの命令のせいかなど思ってた来てみたら、やっぱり。ふふっ……」

「わ、笑いごとじゃありませんっ！ そのせいで、あたし……」

もし目撃したのが本当に先生だったら、今頃どうなっていたか分からない。涙目で抗議する鈴に、さすがに紗彩も申し訳なさそうな顔になった。

「ごめんなさい。あなたが本当にオナニーするとは思わなかったの。だって……もしも嘘の報告をされても、わたしには分からないのよ？」

鈴は、そうは思わなかった。きっと彼女は見抜いてしまう。そして、そんな嘘つきを、好きのまままでいてくれるとも思えない。

「お姉さまに……嘘なんて……」

俯いて唇を噛むと、紗彩は静かに覆い被さり、目蓋に優しく口づけてきた。

「優しい娘ね。そんなあなただから……わたしは、好きなの」

「お、ねえ……さま……」

身体がピクンと小さく跳ねる。耳、鼻の頭、そして頬を遊び回った紗彩のキスは、最後に、喘ぎを漏らす唇を塞いだ。

(はあ……お姉さまのキス……。お姉さまとの、キス……)

やっぱり、オナニーなんかより彼女と触れ合う方が何倍も気持ちいい。鈴は反射的に舌

を伸ばした。紗彩も同じように舌を挿し込んで、空中で戯れる小鳥のように絡み合う。

「可愛いわ、鈴ちゃん……。それじゃ……。オナニーのご褒美、あげるわね……」

ずっと下腹部にあてがわれていた鈴の手が引き抜かれる。入れ替わりに、にっこり微笑む紗彩の指が、下着のゴムをくぐって忍び込んだ。期待に胸を高鳴らせるけれど、ここは学園の保健室。それに先生の存在も気になって、紗彩を押しとどめる。

「あ、待ってお姉さま。こんなところじゃ……」

「心配ないわ。鍵は掛けたし、先生なら、職員会議でしばらく戻ってこないから。もしかして、彼女が出ていったの、気づかなかったの？」

どれだけオナニーに夢中になっていたのかと笑われた気がして、真っ赤になった顔を逸らせる。そんな鈴をなだめるように、紗彩が薄い恥毛をくすぐった。

「あ……………」

優しい心地よさに、眼を閉じた鈴の身体が小さくくねる。侵入者の指先は、草原を走り抜け、下腹部の丘を音もなく滑り降りた。あまりに素早い動きに、鈴の心の準備が間に合わない。脚を開いて歓迎するより早く、目的地に到達した紗彩の五指は、秘密の泉をぐちゃぐちゃに掻き乱し始めた。

「んんあつ……。お姉さま、そこ……。あんっ！」

予想できない不規則な愛撫に恥褻が痺れる。頭が一瞬で真っ白になる。稚拙なオナニーなんて比較にならない。絶妙なポイントと力加減で、意識が飛びそうなほどの快感を与え

てくれる。まるで、鈴以上に鈴の身体を知り尽くしているかのようだ。

「ふあ……あッ！ き、気持ちいい……あ……ああッ!!」

淫核を転がされ涙が溢れた。あまりの快感に、腰が左右に何度も振れる。しかし暴れる鈴をものともせず、紗彩は、もう一方の手でブラウスのボタンを外し始めた。

「んふ。それにしても、鈴ちゃんの格好、とつてもエッチ……」

舌舐めずりする彼女に言われ、改めて自分の姿を確かめる。上はちゃんと服を着てリボンもしているのに、下半身はパンツと靴下のみ。お嬢様学園にあるまじき卑猥な装い。それを紗彩の欲情に満ちた瞳で凝視され、羞恥に身体が燃え上がる。

「や……見ないで……恥ずかしい……ッ！」

「そうよ。なんて恥ずかしい娘なのかしら。ああ……聖リスが、ふしだらな学園だと思われてしまう。こんな悪い娘には、お仕置きが必要ね」

「ごめんなさい、あたし……きやあああうん！」

激しい衝撃が全身を貫いた。陰唇を掻き回していた指が、膣に突き立てられたのだ。螺旋を描きながら体内に侵入してくる圧迫感に、鈴のお尻も卑猥に円を描く。

「あん、そんなに暴れないで。鈴ちゃんのバーズン破れちゃう。こんなところで奪われたくはないでしょう？」

「でも……でもお姉さま……あッ！ か、身体の……なかつ、そんな……ふああッ!!」

暴れるなど言いながら、鉤のように曲げた指で、処女肉を素早く擦り上げた。内側の刺

激に不慣れな身体は、たった一本の指の動きに翻弄され、思うままに転がされてしまう。

「そんなに大きな声を出したら、いくら鍵を掛けても誰かが来るわよ？」

「でも……でも……きゅうンッ！」

紗彩の脅しに怯えた鈴は、必死にもがいてシーツを掴み、口に咥えた。でも多少くぐもつた程度で、高音で漏れる喘ぎには効果が無い。焦りが増すけど、快感の身悶えが勝ってそれ以上は対応できない。その間に、ブラウスはボタンの一番上を残して全開。

「さ、鈴ちゃん。おつきして」

「ヒッ……いいひゃあああん！」

紗彩に、上体を抱き起こされた。背筋を人差し指で逆撫でされ、せつかく咥えたシーツも手離してしまう。仰け反った隙に、ブラのホックを外された。

「お、お姉さま……あん、ン！ そんな、おっぱいまで……」

捏ねるように乳房を揉まれ、身悶えしながら紗彩の首筋に顔を埋めた。逆襲のつもりで彼女の胸にも手を伸ばすけれど、力が入らず鷲掴みにするのが精一杯。指で塞がれた膣口から蜜が滴り、腰が卑猥に踊らされる。それでも責められる一方の展開を打破しようと、紗彩の頸動脈を、震える舌で舐め上げた。

「あヒッ!!」

この不意打ちはさすがに彼女も予想外だったのか、本気の悲鳴で身体を硬直させた。逆襲のチャンス。今度は自分が押し倒す番、と思ったけれど。

「す……凄いい……。鈴ちゃん……もつと、もつとお……」

かえって固く抱き締められて、剥き出しの乳首が彼女の制服に擦られた。

「やん、お姉さまダメですっ！ お、おっぱい擦れて……おっぱい、きゃ、ンふ……っ」  
両腕ごと抱きすくめられ、攻撃手段を奪われた鈴は、再び首筋へのキスを試みる。しかしそれは、またも逆効果だった。

「あん、鈴ちゃ……きゅッ、ふううん」

仔犬のように喉を鳴らした紗彩にのしかかれて、鈴の方が押し倒されてしまった。しかも彼女は、お返しとばかりに首筋を執拗に何度も舐め上げてくる。

「ふふっ、鈴ちゃんおいしい……ちゅ、れろっ」

「お……おおお姉さ……はううっ！ な、舐めちゃらめっ……！ あ、ンひうっ！」

口元から鎖骨までひとしきり舐めまくり、紗彩が身体を起こした。悶える鈴を、嗜虐的な笑みで眺め見下ろす。

「そうそう。そんな感じで、じっとしていてね」

紗彩はスカートのポケットをごそごそ探り、白い何かを取り出した。そして細長くて伸縮性のあるそれで、鈴の両手首をぐるぐる縛り始める。

「お、お姉さま！ 何ですかこれ!!」

「包帯よ。知らないの？」

「そ、そういうことじゃなくて……あん、きつい……っ！」

「んふっ、せつかくの保健室だし、使えるかと思って調達しておいたの。鈴ちゃんを可愛がるのに夢中で、つい忘れていたけれど」

快感ボケしていたせいで、ろくな抵抗もできずに難なく拘束されてしまった。鈴のお腹に跨がった紗彩は、胸元のリボンを解いて投げ捨て、自らもブレザーとブラウスのボタンを開いた。そしてブラも捲り上げると、柔らかな乳房をぷるんと露出させる。何度見ても生唾ものの、お姉さまの素敵なナマ乳。つい手を伸ばしかけ、奪われた自由に眉を顰める。

「んふ……鈴ちゃんのおっぱい、可愛い……好き……」

「あっ……きゅふぁ……」

その不満は、一瞬だけ、搔き消された。身体を倒した紗彩が裸の胸と胸を重ね合わせ、くねくね捏ね始めたのだ。控え目とはいえ、鈴にもある、それなりの膨らみ。それを量感たっぷりの柔乳が包み、揉みしだく。温かくて滑らかな肌に撫でられる。

「お、お姉さまのおっぱい……柔らかくて、温かくて……はぁ……ふっ、あっ」

「鈴ちゃんの肌も、すべすべで赤ちゃんみたい……気持ちいい……ほらっ」

「あ……あ！　ち、乳首……乳首がっ……あぁん！」

勃起した肉蕾同士が柔乳房に埋もれる快感に、鈴の身体もくねくね踊る。あまりにも気持ちよくて紗彩に抱きつきたくなるけれど、拘束された腕に自由がない。身体を駆け巡る欲求不満が、尿意と錯覚するような焦燥となって、鈴に脚をばたつかせた。

「お姉さま……お姉さまぁあ!!」

それでも欲求が満たされない鈴は、懸命に背中を仰け反らせた。せめてもという必死の思いで胸を突き出し、激しく乳房を擦り合わせる。

「凄いわ鈴ちゃん……たまらない……ッ!!」

自ら快感を求める恋人に、紗彩は淫猥なキスのご褒美をくれた。唇をベタベタになるほど舐め回し、引き抜く勢いで舌を吸い上げる。そして頬を両手で挟むと、大量の唾液を口の中に流し込んできた。

「あぶ、んぶ……ぶあ。あふ……んぐっ」

口腔から溢れんばかりの量を、鈴は溺れそうになりながら喉に流し込んだ。まるで媚薬でも飲まされたように頭が呆ける。胸も下半身も性欲を持って余し、彼女の太腿に股間を擦りつけてしまう。

「んふ、鈴ちゃんの腰、いやらしい動き……。いいわ、一緒に気持ちよくなりましょう」

紗彩は後ろに上体を傾けながら下着を脱ぎ捨て、互いの脚を交差させた。さらに鈴の右脚を抱えると、ふくらはぎの稜線を指でなぞりながら妖しく微笑む。

「……今度は、ここでキスよ」

「ここでって……え!!」

何をするつもりか察する前に、彼女の腰が素早く動いた。脚の付け根に淫猥な熱を感じた瞬間、女性器同士が粘着音を立てて吸いついた。

「ふああああつ、ひいいあああつ!!」

鈴は、そして仕掛けた側の紗彩さえ、腰を震わせながら派手に仰け反った。衝撃で互いの股間が捻じれ、結合が深くなる。くすぐったいような、痺れるような、異様なゾクゾクが股間から背筋を走る。

「お、お姉さま離れて！ 腰が……あそこが、何か……変!!」

「いいの、変になって！ あ……ほら、もっと、深くっ！」

紗彩は鈴の脚を胸に抱え、腰で円を描き出した。複雑な恥裂の襞が、まるでパズルを組み合わせるように絡み合う。ただでさえ過敏な媚肉が、涎を垂らしてキスを交わし合う。

「やめて！ やめ……怖い、やああああ!!」

鈴は眼を見開いた。甘美な淫摩擦から生まれる、あまりに苛烈な快感電流に。しかし紗彩は容赦しない。速度を上げながら、縦に横に腰をくねらせる。

「ああ……鈴ちゃんのおま○こ、わたしのに吸いついてる……。分かる？ あはっ、ほらまた……あんっ。いい……気持ちいい！」

「う、動かないでお姉さま！ あ、そこ痺れ……て……お、かしく……なりゆっ！」

唇や指とはまるで異次元の気持ちよさ。頭の中を掻き回す、甘美で妖しい初めての感覚に、鈴は恐怖を覚えて助けを求めた。

「あふっ、ふふっ。こ、腰……動かしてるの……あ、あんツ、鈴ちゃんの方じゃない」

「え……ああ!!」

蕩けた笑みの紗彩に指摘され、鈴は目を疑った。お腹が波打っている。紗彩の脚に膝を





絡め、自ら腰をいやらしくくねらせている。一分の隙もないほど密着した性器の間で、愛液をぐちゃぐちゃ攪拌かくはんしている。

「どうして、こんな……動いちやう！ あああ！ ああああ!!」

心と身体のバランスが崩れ、鈴は半狂乱で頭を振り立てた。思考が痺れ、身体の暴走を許してしまう。性器のキスに酔い痴れてしまう。

「おおお姉さまあ！ き、気持ちいい！ おま〇こ、気持ちいいいいッ!!」

「わたしも気持ちいい！ あ、鈴……りッ……鈴、ちゃん!!」

紗彩もシューツを握り締め、腰をうねらせていた。彼女が快感で顔を歪ませる姿に、胸の高まりが止まらない。

（も、もう……我慢できないッ!!）

淫摩擦で生まれた媚熱が、鈴の思考を完全に麻痺させた。理性を手離し、絶頂に向かって走り始める。

「イッちやいます！ あ……あたし、ダメ、イッちやう……いいいつちやああ!」

「待って！ まだイッちやダメ！ わたしも一緒に……」

急激な鈴の変化に、紗彩の方が焦りを見せた。でも、一度暴走を始めてしまった身体を止められるはずがない。

「でもでもお姉さま！ あたし……あた、あああああ、し……っ!」

絶頂の予感に身体が痙攣を起す。それに追いつこうとして、紗彩が摩擦のスピードを

上げた。そんなことをされたら堪らない。陰唇とクリトリスが激しく擦れ合い、鈴の暴走に拍車を掛ける。

「りや、め！ おね、えさま！ らめつ、らめらめッ！ いっちゃう！ いく……イクイク、イツ……きゅううううッ!!」

大量の愛液をしぶかせながら、鈴の身体が激しく反り返った。絶頂痙攣に全身がガクガク跳ね上がる。抑えようと思っても身体が言うことを聞いてくれない。遠ざかる気配のない快感に恐怖さえ覚え、ベッドのパイプを力いっぱい握り締める。

「あふつ、ふううううはッ！ ふは、は、はっ……ン……ッ、ふ、は、ああああ……」

何度も深呼吸を試みて、やっと息が整ってきた。満足を通り越し、頭が呆けてしまいそうだ。しかし、快感でお腹いっぱい鈴の鈴に対して紗彩は不満顔。

「ひどいわ鈴ちゃん。待ってって言ったのに」

「ご、ごめんなさい……でも……でも……」

「口答えは許さない」

言葉ほどには怒った様子は見せず、しかし切なげに身体をくゆらせる。彼女はブラウスの裾を持ち上げながら、縛られたままの鈴の顔に跨がってきた。

開ききった女性器の亀裂。それが、滴り落ちそうなほどたっぷり蜜を湛え、妖しく輝いている。淫裂の濃厚な匂いに鼻孔を刺激され、鈴は無意識に唾を飲み込む。

「舐めて……わたしもイカせて……」

鈴は、両手でガッツポーズを取ってみせた。元気をアピールしたつもりだけど、話し掛けられてから数秒のタイムラグがあったのでは、説得力がない。

疲労は自覚していた。何しろ、放課後の教養講座を日替わりで掛け持ちしているのだから。お茶にお花に礼儀作法。それに加えて声楽と社交ダンス。前の三つは基本だと思っただけ、後の二つは、万が一、本当に万が一、何かの間違いで華姫候補にされてしまった時に備えて。特にダンスは、華姫に必須らしい。

講座を受け始めて、三週間。もちろん何ひとつ様になっていないし、初体験と失敗と挫折の連続。でも幸いなことに、この教養講座は基本的に初心者向けだった。受講者みんなが下手なので、ひとりだけ無様を晒して恥を搔くという場面は、今のところない。

ただ、日替わり受講などという無謀をしているのは、おそらく鈴だけ。

今週は、紗彩とエッチの最中に寝てしまうことが続き、彼女にも心配されてしまった。受講は秘密にしているの、なおのこと。そのせいか、このところ紗彩から夜の呼び出しがない。寂しいけれど、でも。

(がんばらなくちゃ。お姉さまにふさわしい女性になるんだ!)

その日も、三時間のダンスレッスンを受けて、ふらふらになりながら帰途についた。ポールも真っ直ぐに投げられない運動オンチがまともに踊れるようになるには、あとどれくらいの間が必要なのだろう。

「……………疲れた」

すっかり口癖になった独り言を呟きながら、やつとの思いで寮の玄関に辿り着く。のろのろとした動作で靴を所定の下駄箱に入れてみると、何か声が聞こえた気がした。

「あ、佐崎さん」

「……………はい？」

名前を呼ばれたと気づくまで、約三秒。寮監さんが、渋い顔でこちらを睨んでいる。しかし彼女は鈴を鈍い子だと認識しているようで、大して気にも留めず本題に入った。

「今日から、あなたの部屋に新しい子が入ったから。ちゃんと挨拶するのよ？」

なんだか、お母さんのお小言みたいな注意の仕方だ。いくら鈴が人見知りだからといって、知らない人に挨拶するくらいはできる。ちよつとだけムツとしたけど、鈴はそれを飲み込んで鞆を両手で持ち直し、寮監に「分かりました」と会釈した。

「新しい子かあ……………どの部屋に入るのかな。ああ、あたしの部屋って言ってたっけ」

階段を上がっていた鈴の足が、ピタリと止まる。

「……………あたしの部屋？ 挨拶しろってことは……………あたしの部屋に誰かいるの!？」

どこまで寝惚けていたのだろう。寮監に注意されるわけだ。現状、この空き室は紗彩か鈴の部屋のみ。華姫部屋に入るわけがないのだから、後は考えるまでもない。

まさに青天の霹靂。事態を理解した頃には、すでに自分の部屋の前に立っていた。

「どどど……………どうしよう」

ドアの向こうに、自分の部屋に赤の他人がいて、これから一緒に生活していく。紗彩と

同室になった時は香佳のことを引きずっていたし、すぐに特別な関係になって、あれこれ考える余裕がなかった。

「こういうことつて、前もって教えてくれるものなんじゃないの!？」

鈴の入寮時にも手違いがあったし、あの寮監、あまり仕事をしている印象がない。きつと聞き分けのいいお嬢様ばかり相手にしているせいだ。消灯後の見回りすらしていないのだから。おかげで紗彩の部屋に行き放題だったので、文句を言うつもりはないけれど。

何にせよ、いつまでも部屋の前に突っ立っているわけにはいかない。

「き、緊張することなんてないでしょっ。この学園では、あたしの方が先輩なんだしっ」  
自分に気合を入れドアノブを回す。その短い間に「恐い人とか、テンション高すぎな人だったら……」と、ネガティブなイメージが頭をぐるぐる回って、腰から下が逃げ出す準備を始める。でも上半身と下半身で意思の統一が図られる前に、扉が開いてしまった。

「あ……」

夕陽でオレンジに染まる窓から外を眺める、少女の後ろ姿。長身で、腰まである長い黒髪。聖リスの白い制服を身に着けているけれど、誰かを思い出さずにいられなかった。

「きょうちゃん……」

口が、自然にその名を紡いだ。小さな呟きだったのに、しっかりと耳に届いたらしい。長い髪を優雅に揺らしながら、少女が振り返る。

「あ、あの……ごめんなさい。後ろ姿が知ってる娘に似ていたものだから。あつ、あたし

はこの部屋の……あの、同室の……ええっと……」

慌てて言い繕おうとしたせいで、自分の名前すら出てこない。

（やだもう……何でこうなっちゃうの!!）

顔を上げられない。気取るつもりなんてなかったのに、第一印象は最悪だ。

「……久しぶり、鈴」

「は、はいっ！ お久しぶりで……え？」

どうして自分の名前を。戸惑いながら上げた視線の先で、見覚えのある少女が静かに佇んでいた。目を疑い、ゴシゴシ擦って、もう一度確かめる。

「……………きょうちゃん!!」

信じられない。こんなの絶対に夢。奇跡でもなければ起こりえない。

でも、朝の目覚めと同時に、パジャマ姿の香佳が「おはよう」と挨拶してくれた。

ただその声は硬く、鈴も、眼を合わせることができなかった。再会を喜べたのは最初の一瞬だけ。昨夜はお互いがぎごちなく、ろくな会話もできていない。告白失敗のトラウマが、ふたりの間に重苦しい空気となって横たわっていた。

「鹿波さんは、どちらからいらしたの？」

隣の席で、一ヶ月前の自分に向けられた質問が飛び交っている。一体どんな経緯でそうなったのか、彼女は聖リスに転入し、同じクラスになり、しかも席まで隣同士に。興奮が

止まらない。浮かれているのが分かる。

でも、それ以上に鈴の心を占めていたのは、戸惑いと後ろめたさ。二度と会うことはな  
いと思っていた元親友と同室なんて、どう接すればいいのか見当もつかない。

(本当なら、お姉さまにも紹介したかったけど……)

夕食のタイミングが合わなかったのか、紗彩とは一緒にならなかった。もともと「彼女  
がケンカ別れしたきょうちゃんです」と紹介されたところで、紗彩だって困ってしまう。

(ま……まずは、きょうちゃんと仲直りしなくちゃ。そうだよ、謝らなくちゃ！ でも、  
どうやって切り出せばいいんだろう……)

それにしても、転入生としての香佳の注目度は鈴なんかの比ではない。机に群がる人数  
も、質問の数も。普通サイズで無口な鈴さえ普通に転校生らしい歓迎を受けたのだから、  
ナイスバディのミスティアアス美少女が騒がれないはずがない。

親友だった自分が話をできずに悩んでいるのに。無邪気なクラスメイトがちよつとだけ  
憎らしくなる。焼き餅気分でちらりと盗み見たら、香佳と眼が合ってしまった。慌てて視  
線を逸らす。しかし、ひと呼吸置いた後、香佳が静かに立ち上がった。

「あら、どうしたの鹿波さん」

「ごめんなさい。私、佐崎さんに用があるの」

そう言うと、戸惑うクラスメイトを押し退けて、香佳は鈴の手を握った。

「来て」



「え、あの……きょうちゃん……!？」

呆気にとられる少女たちを尻目に、香佳は鈴を引っ張って教室を飛び出した。無言でずんずん進む彼女が、少し怖い。校舎を出て、裏庭を横切り、着いた場所は、あの温室。

どうして、香佳がここを知っているのだろう。

しかし、疑問を口にするより早く、鈴は香佳に抱きすくめられていた。むっとする温室の湿度と、香佳の体温。焦る鈴の制服の中が、たちまち汗ばむ。何が起きたのか理解できずに、自分を拘束する腕の中で、鈴は身体を強張らせた。

「鈴……髪、切ったのね」

香佳の手が、襟足を撫でる。その愛おしげな指先と声は、むしろ鈴を混乱させた。

(な、何で……どうして?)

彼女は自分を拒んだはず。突き離したり無視したりするならともかく、こうして抱き締められる理由が分からない。戸惑いと罪悪感が、鈴をこの抱擁から逃れさせようとするでも、諦めきれない香佳への想いが、身体をそこに押し留める。

(あたし……どうしたら……)

何をすべきか、何を言うべきか。答えを出ずにいると、香佳が声を震わせた。

「ごめんね、鈴……」

戸惑う鈴の顔を自分の胸に抱き寄せて、今にも泣いてしまいうように。

「本当は、昨日のうちに謝らなくちゃいけなかったのに……怖くて言えなかった……」

「ど……どうしたの、きょうちゃん。謝るなら、あたしの方だよ」

もがくように抱擁から逃れた鈴は、彼女の瞳を見詰め、でも直視できず顔を逸らせた。香佳は棒立ちのように佇んで、首を傾げる。

「どうして、鈴が謝るの？」

「だってそうでしょう！ お、女の子同士なのに、こ……こ、告白なんかして……」

紗彩に甘えて、癒やされた気になっていた。でも、ただ忘れようとしていただけ。誰にも愛されてはいけないと、自分で言っていたはずなのに。誰もが紗彩のように受け入れてくれるわけじゃない。だからあの時、香佳は逃げた。

「そうだよ、あたし……きょうちゃんに抱き締められる資格なんて……ない……」

胸を詰まらせ、よろよると、ふらつきながら彼女から離れようとした時。

「……鈴のことだから、そう考えてると思っていたわ」

眼を伏せた香佳が、深い溜め息のように、静かな声で呟いた。でもそれは、鈴に向けての言葉というより、まるで懺悔のように後悔の色を濃く滲ませていた。

ゆっくりと、香佳が顔を上げる。悲しげな視線に射抜かれて、鈴は一步も動けない。

「今さら遅いかもしれない……。でも私は、あなたに会いたくて、転校先を必死に探して……あなたを追いかけてここまで来たのよ、鈴」

こんな思い詰めたような彼女の声を、聞いた覚えがない。しかしそれ以上に、彼女が何を言っているのか、鈴は少しも理解できなかった。

（あたしを追いかけて来たって……どうして？ 何でそんな必要があるの？ それに転校だよ？ 転校って、そんな理由でできるものなの!!）

いくつもの疑問が頭を飛び交い、整理できない。香佳は、困惑する鈴に歩み寄り、転校前より短くなった髪を撫でた。

「告白されて、驚いたわ。とても。どうしていいのかわからなくて、私は、逃げることで済まされた。だって……その時まで、鈴のことは妹のように思っていたから……」  
妹。そうとしか見られていなかったことに、少しだけ気持ち沈む。しかし、鈴はハッとして彼女を見上げた。香佳が、唇を噛み締め震えている。

「でも、違った……。鈴がいなくなってから、私……」

まさか——。香佳が言葉を紡ぐたび、鈴の中で都合のいい予想が膨らみ始める。それを期待してはいけなく、理性が押し留める。

「私、どうして逃げてしまったんだろう。鈴が勇気を出して告白してくれたのに。あなたを傷つけてしまったことを後悔して、悩んで……鈴のいない毎日に耐えられなくなつて……そんなことになつてから、やつと分かったの、気づいたの！ 私の、本当の気持ち」  
でも駄目だった。脚が震える。張り上げる香佳の音が、鈴の呼吸を加速させる。もし違つたらということすら考えられない。もう、一番欲しい言葉以外、受け入れられない。

「好きよ。鈴……愛してる……」

その瞬間、まるで糸を切られた操り人形のように、鈴の膝から力が抜けた。床にお尻を

ぺたりと突いて、呆然とする。これは夢。きつと夢だ。でも、感情が胸の奥から込み上げて、しゃくり上げるように涙と声を溢れさせる。

「きよう……ちゃん……。きようちゃん……。あ……あたし……あたし……！」

「ごめんさい、鈴……。辛い思いをさせてしまつて……」

紗彩も両膝を突き、肩を強く抱き締めてきた。鈴は、何も言えずに、ただ彼女の首にしがみついて涙を流した。後悔と罪の意識に苛まれ続けた日々の分だけ、泣きじやくつた。

教室に戻つたふたりを出迎えたのは、ぽかんと口を開けたクラスメイトたちだった。深刻な顔で出ていったのに、まるで新婚さんのように腕を組んで帰つてきたのだから。一見すると背の高い香佳が新郎役だけど、彼女の方が鈴にべつたりなのがすぐ分かる。

その状況は一日中続いた。授業中こそ真面目な素振り。だけど休み時間になれば、椅子を寄せて鈴の腕に抱きつく。この娘は自分のものだと宣言するかのよう。クラスのみんなも、さすがに戸惑いを隠せない。でもそれは、当事者である鈴も同じだった。

「あの……きようちゃん。みんなが変な目で見てるよ……」

「私たちが仲良しだつて教えているだけよ」

平然と言いきる彼女に違和感を覚える。香佳という少女は、こんなにも情熱的だったのだろうか。凜として、いつでも冷静で。他者の目を気にする人ではなかったけど、だからといって、好奇の目で見られることも、決して好まなかつたはず。

鈴に事情を聞こうとした娘もいたけれど、香佳の鋭い視線に牽制されあえなく退散。さすがにこれには、鈴も申し訳ない気持ちになった。

放課後の帰り道でも、香佳は鈴を離そうとしなかった。腕を組んだり手を握ったり。そして部屋に入るなり、鈴を全身で抱き締めた。まるで、空白の時間を埋めるかのように。

「鈴……ああ鈴……。夢みたい……。毎日を、あなたと同じ部屋で過ごせるなんて……」  
喘ぎながら、香佳が鈴の名前を繰り返し呼び続ける。頬に頬を擦りつけてくる。自分を抱き締める腕の力で、震える声で、彼女の切ないまでの強い想いが伝わってくる。

鈴も香佳の背中に腕を回そうとして、でもその指先に戸惑いが生まれた。香佳と仲直りできて、告白が成就して、心の傷が癒やされたはずなのに、別の痛みが鈴を責め苛む。身も心も捧げた別の女性の存在が、鈴をためらわせた。

「どうすればいいんだろう……」

浴槽に張った湯の中で、鈴は膝を抱えた。

自分は紗彩のものになると誓った。でも、それは香佳に振られたと思ひ込んだから。ならば、香佳を選んで紗彩とさよならするのか。それとも、紗彩を選んで香佳にはごめんなさいと告げるのか。

「そんなの、無理だよ……」

人との関わりを極端に避けてきたから、付き合い方も別れ方も知らない。

本には、たくさんの恋愛の形が書いてあった。特に三角関係は恋愛の王道。だからヒントもそこにあると思ったのに、参考になりそうなものも思い出せない。それはそうだ。たがいは、主人公が強い意志と決断力を発揮して、最終的にひとりを選ぶ物語ばかり。今の鈴にはないものばかり要求してくる。

「……はあ」

不誠実だと分かっているながら、どちらかと別れる自分が想像できない。考えただけで胸が張り裂けそうになる。俯いて出口のない自問自答を繰り返し、助けを求めるように、親友の名を呟く。

「……………きょうちゃん……………」

「呼んだ？」

独り言に返事が返ってきたから、心臓が飛び出るかと思うほど驚いた。でも、浴室のドアを開けた香佳の姿は、鈴をさらに動揺させた。

タオルで前を隠しもせず、その裸体を、全裸を、惜しげもなく電灯の下に晒している。彼女は少しもためらうことなく、長い黒髪を後ろで束ねながら浴室に足を踏み入れた。

「ど……………どど、どうしたのきょうちゃん!!」

「せっかくだから一緒に入ろうと思って」

鈴の方が慌てて入口に背を向ける。その背後で、平然と身体を流す香佳の声。

（どうしよう……………きょうちゃんのおっぱい、見ちゃった……………!）

一瞬だったけど、それはしつかりと網膜に焼き付いていた。メロンでも抱えているかのような豊かな実り。なのに重力に負けることなく、完璧なまでの半球形を保っていた。小豆のようにぷっくり膨れた先端の蕾を、美味しそうだと思った自分が怖い。

鈴よりも白い肌や、細い腰のくびれも、同じ女子として、羨望の対象にしかならない。(えっと……ええっと……あ、そうだ。出なくちゃ！)

親友の全裸で冷静さを失っていた鈴は、やっと自分がすべき行動に辿り着く。でもそれは一歩遅かった。すでに、香佳は入湯を完了。彼女の体積分、お湯が浴槽から溢れ出す。

「はあ……」

香佳は眼を閉じ、気持ちよさそうに吐息を漏らした。乳房の上部を、まるで風船のようにぷっかり浮かせて。普段の鈴なら、生唾を飲み込んでいたかもしれない。でも今は戸惑いが先に立って、そんな気分にするなれない。

「きょうちゃん……急にどうしたの？」

平静を装って尋ねる。すると彼女は、不意に真顔になって鈴と向き合った。

「鈴が、怒ってると思ったから……」

「あたしが？　なんで!？」

「だって……私が好きって言ったのに、あまり嬉しそうな顔、してないから……」

香佳が、悲しげに瞳を揺らす。その視線に刺されたかのように、胸が痛んだ。もしかして彼女は気づいていたのだろうか。鈴の心に、別の誰かがいることを。

「そ……そんなことないよ！　すぐ嬉しかったよ！　ただ……ちよつとびっくりしちゃつて……。だつてさ、ほら。ずつと、きょうちゃんに嫌われたと思つていたから……」  
嘘じゃない。全部本当のこと。なのに、ひと言ひと言、罪の意識が重くのしかかる。

「……本当？　鈴、本当に怒つてない？」

「ほ、本当だよ!!」

自分に言い聞かせるように、強く頷く。不安げだった香佳の瞳に明るい光が宿る。

「……よかつた」

その眼が、潤んでいた。それは信じられない衝撃だった。鈴以上に他人に関心を持たない彼女が、好きな人のことで不安になつて、涙を浮かべるなんて。健気な笑顔が、鈴の胸を痛いほど締め付ける。

(……あたし、やつぱり……きょうちゃんが好きなんだ)

紗彩との関係を重ねても、断ち切れていなかった香佳への想い。そのことを知つた時は、鈴は彼女の腕の中にいた。濡れた素肌が触れ合う。浴槽にもたれかかつた身体に、香佳が覆い被さつてくる。近づくと唇を、何の疑問も持たず自然に受け入れる。

「ん……はあ……。きょうちゃん……ちゅっ」

「鈴、ン……！　ちゅ、ちゅば……」

静かな浴室に、ふたりのあえかな息遣いがこだまする。うっとり眼を閉じ、小鳥のように互いの唇を啄む。でも鈴は、すぐに物足りなくなつてしまった。この身体は、すでに



覚え込まされていたから。頭の芯まで痺れるような、もつと淫靡で刺激的なキスを。

欲求不満で身悶えると、硬くしこった鈴の乳首が、香佳のそれと擦れ合った。

「ンッ……………んふああ…………ッ！」

胸に流れた甘美な電気思わず仰け反る。そのタイミングを見計らっていたように、喘いで開いた鈴の口に、香佳の舌がぬるりと忍び込んだ。反射的に吸いつき唾液を求め、しかし彼女は巧みな動きでそれを避けると、両手で鈴の顔を挟み、捻じ込むように舌を突き刺してきた。味蕾でざらつく表面を頬の内側に、舌の表面に擦りつけ、鈴の口腔内の全てを嵐のように蹂躪した。

「ふおつ、ふあむッ、きようちや…………ふッむううッ!!」

もはやキスと呼べるのかも定かでない、求めていた以上の激しい舌愛撫に、鈴はお湯の飛沫を飛ばしながら何度も身体を跳ね上げた。両腕で香佳の背中にしがみつき、絶頂時のように腰を引き攣らせる。身体が痙攣するたびに、密着した乳房の間で硬直乳首が擦れ、気持ちよすぎて頭が一瞬真っ白に染まる。

「きようちや…………あふッ、んむ…………じゅ、じゅば、じゅるるるっ！」

鈴も負けじと、というより何も考えられなくなつて、夢中で香佳を求めた。今度は逃がすまいとするように舌に吸いつき、纏わりついていていた唾液を、卑猥な音で啜り尽くす。

「あ、ああ…………り、鈴すご…………すごいッ…………あッ!!」

香佳の潤んだ瞳が、嬉しそうに細められる。そんな眼をどこかで見たような気がしたけ

れど、鈴は何も考えようともせずキスの快感を貪った。

「あ……はあ……ッ！ はあ……はあ……」

酸欠になりそうな寸前で、唾液の糸を引きながら唇が離れた。淫靡な笑みで見下ろしてくる香佳の頬が、欲情の桜色に染まっている。

「……鈴って、意外とキス、上手なのね」

「えっ!!」

心の中で蒼褪める。香佳との口づけが嬉しくて、気持ちよすぎて、欲求に流されるまま初心者のふりをするこすら忘れていた。

「そ、それは……。きょうちゃんが激しくするから、あたし、夢中で……」

香佳のせいにした。他に言い訳なんて思いつかなかった。自分の卑怯さが苦しくて逸らした眼を、彼女はどうか解釈したのだろう。

「嬉しい……」

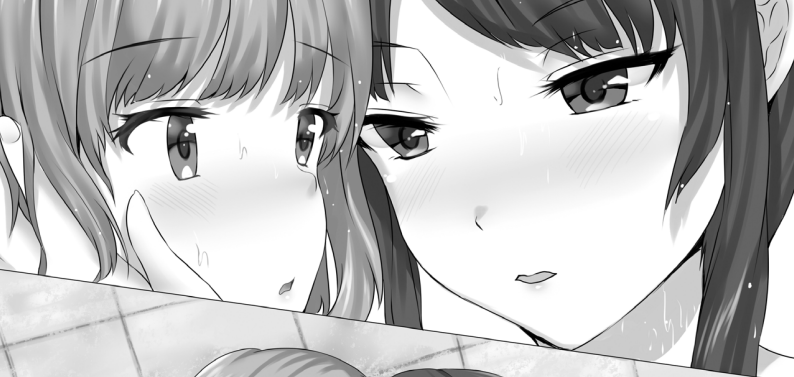
「……………ふあっ!？」

お湯のゆらめきに隠れて、脚の間に何かが滑り込んだ。指だと気づいた時には、恥裂を擦り上げられていた。温められてふやけた陰唇が、自ら絡みついて香佳の指を包み込む。

「鈴のここ、ぬるぬるする。これってお湯じゃないわね。ね、これは何？ 教えて、鈴」

「そ、それは……それは……あ……っ!」

湯気より熱い息を耳に吹きかけ、執拗に尋ねてくる。気持ちよさに身体が震えるけど、



それよりも鈴には、驚きの方が大きかった。

(きよ……きよちゃん、こんなエッチなことするなんて……!)

性的なことなんて、一切興味がなさそうな顔をしているくせに。でも、エッチ調教の済んだ鈴の身体は、戸惑いを置き去りにして、彼女の大胆行動をすんなり受け入れた。それどころか、秘部に触れているだけで少しも愛撫してくれないことに不満を漏らす。

「お……お願いきよちゃん……。意地悪しないでえ……」

「あら。そんなこと言うなら……」

半泣きで抗議すると、指がスツと性器から離れた。鈴は慌てて腿を閉じ、彼女の手を挟み込む。その反応が、香佳の瞳に嗜虐的な光を宿らせた。

「答えなさい、鈴。このぬるぬるは何？」

ゾクゾクと、妖しい悦びに身体が震える。従わされる快感が、鈴を芯から熱くする。それでも躊躇していると、彼女の薄い二枚の爪が、淫核を抓り上げた。

「はああう！ うあああッ!!」

痛みと快感が同時に襲う鮮烈な感覚に、腰が跳ね上がる。しかしここは狭い浴槽の中。しかも香佳に押さえ込まれて、逃げ場のない戦慄に頭を振り立てる。

「そ、それは……ッ！ エッチなお汁……!! はああうッ！ い、い……いやらしいことすると……はぐッ……おとおおま○こから、も……漏れちゃうのおおおッ!!」

「ちゃんとと言えるじゃない。相変わらず世話の焼ける娘ね」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作・転載・無断転載は厳禁です。著作権者様の許可なく複製・転載・無断転載は厳禁です。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!